慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	森鷗外「独身」論
Sub Title	On Dokushin by Mori Ogai
Author	古郡, 康人(Furukori, Yasuhito)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1994
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.65, (1994. 3) ,p.197- 214
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	檜谷昭彦, 佐藤一郎両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00650001-0197

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

森鷗外「独身」論

古郡康人

1

小倉に第十二師団軍医部長として赴任していた時代（明32・6～35・3）の森鷗外が、東京千駄木団子坂上の観潮楼を守る母峰子との頻繁な書簡の往復において、主たる話題の一つとしたのは、鷗外自身の結婚問題であった。明治二十三年十一月に赤松登志子と離婚して以後、独身生活を続けていた鷗外は、母宛の書簡において〈妻を持つべきや否やはまだ中々決心出来ず考中に御座候〉（明32・12・10）、〈良家の美しき子は容易く見られずむつかしきものに候〉（明34・1・11）などと述べ、何人かの具体的候補の検討途上には〈一件は別品主義が勝つか家柄主義が勝つか何だか家柄主義の勢力余程強く相成候やう存ぜられ候〉（明34・4・14）といった感想を述べたりもしているが、そのような過程で鷗外が表明している最大の点は、〈日本流の結婚はたとひ分別ある年になりての結婚にても不知同志（シラヌドウシ）の事故（ユエ）到底はつきり先の見込付くといふ事無之是非なき事に候〉（推定、明34・4・17頃）、〈日本にて妻をめとるは富籤（トミクジ）のやうなものにて今日籤（クジ）

を買ひても此の如し十年後に買ひても亦此の如しきつと当る籤は無之候〉（明34・5・27）といった、日本の結婚習俗への不信不満の念である。そしてこれは小倉時代の随筆「心頭語」（明33・2・1～34・2・18）においても鷗外が取り上げた問題であった。

「心頭語」において日本の結婚習俗を論じているのは第四十一回から第四十七回（明33・6・21～29）に至る部分である。「心頭語」は、内容の上から、処世上の箴言と学藝・社会・実生活をめぐる随筆とに二大別されること、また鷗外自身の『切抜帖』が存する前者については、その大半がクニッゲ『交際法』の翻案的抄訳であること等が、小堀桂一郎氏の研究[1]によって明らかにされているが、この部分は、鷗外の『切抜帖』にありながらも〈クニッゲの中に対応する原文無し、日本の実状に即した鷗外自身の意見[2]〉と見なしうる箇所である。ここで鷗外は、恋愛について論ずることの困難な所以を〈我国と西洋と全くその俗を殊にしたればなり〉と述べ、〈我俗は相識らずして相婚す〉のに対して〈西洋の俗は相識りて択み、相択みて挑み、諾すれば婚成り、諾せざれば婚破る〉というものであることを指摘する。そして男女双方の事情から結婚はしたものの、〈二人は始より相愛して相婚したるにあらざるをもて、寝るに其室を同うせず。然るに夫は妻の才貌兼備はれるを見、妻は夫の品性高潔なるを見て、内に相愛する情を生〉じ、激しい風雨の夜にその相愛の情を確認して、初めて実質的結婚生活に入ったという物語を紹介、〈屋外は風雨愈々劇しく、細流の水は板橋の破片を駈りて奔り、苑木の梢は風に吹き折られて飛ぶ。さもあらばあれ、是れ春を催す風雨なり。以上はヨハンナ、クレンムの著す所の小説ヘロの燈の梗概なり。（中略）われはこれを読みて、西洋人の所謂恋愛と我婚姻の俗との反映如何を顧み、心に思ふところあり〉と述べ、〈西洋の先愛後婚の俗は開明の俗にして、東洋先婚後愛の俗野蛮の俗なるか〉と問題を提起、〈願くば我をして諸家の先婚後愛に関する意見を聞いて、以て平生の疑惑を解くことを得しめよ〉と述べたので

あった。

鷗外は、明治三十五年一月四日、東京で荒木しげと結婚、翌五日に新婦とともに小倉へ下向、三月十八日に東京の第一師団軍医部長に転任する辞令を受けたのち、三月二十六日に小倉を出立、二十八日観潮楼に入った。鷗外夫人森しげ女の小説「波瀾」(「スバル」明42・12)は、一月四日、前日に東京で挙式した大野豊と井上富子が小倉に向かい、三月中旬には大野が帝国採炭会社理事長から農商務省の某局長として東京へ転任することになって、二十五日小倉を立ったところまでを描いている。そして「波瀾」発表の翌月、鷗外自身は、その大野豊に井上富子との縁談話がもちあがった頃の、まだ独身時代に時間的には遡った設定のもとに、「独身」(「スバル」明43・1)を発表する。[3] 伝記的事実を鷗外書簡によって窺うなら、母峰子に、荒木しげの離婚歴という〈失錯〉が許しがたい内容のものであったのかどうかを問い、差し支えないものであれば性質如何によって決定したいと述べ(明34・11・1)、やがて妹小金井きみ子に〈荒木令嬢の事、兎も角も相迎候事と決心仕候。併し随分苦労の種と存候〉(明34・12・5)と書き送るあたりまでの期間に取材した作品である。小倉時代の結婚をめぐる言説や「波瀾」との関係においても興味深い作品「独身」について、以下論じていきたい。

2

「独身」は全六節から成る。各節の内容を簡単に記しておく。

一、戸外に伝便の鈴の音・花櫚糖(かりんとう)売の女の声がする小倉の冬の夜の、語り手による提示(伝便についての講釈も開陳)。

二、主人大野豊と客戸川・富田との間に交わされる有妻無妻論。

三、戸川の話（雪の夜、寂しさから下女を妻とした男の話）。
四、曹洞宗の僧寧国寺さんの来居、大野による三宝帰依についての講釈。
五、富田の話（稲荷の託宣によって下女を妻とした男の話）。
六、大野の官能をめぐる自己点検と、お祖母あさんからの手紙（井上富子のこと）。

以上、整然とした構成といえようが、さてそうした印象をもたらす布置を形成している要素、たとえば、二人の客が話した下女との婚姻話・語り手と大野とによる二つの〈講釈〉・寧国寺さんの登場・東京のお祖母あさんからの手紙、等が、ではプロット生成にどのように参画しているかということになると、直ちに明確にはしがたいように思われる。富田によってなされる〈独身攻撃〉に対する大野の反論は明示されていない。お祖母あさんが勧める富子に対する大野の感情もまた明らかでない。むろん、「波瀾」を閲読した読者にすれば、大野と富子との結婚は既成の事実であり、お祖母あさんの手紙における〈尤前便に申上候通、不幸なる境遇に居られし人なれば〉とか〈尚々精二郎夫婦よりも宜しく可申上様申出候〉といった、これだけでは富子の不幸の内容や精二郎とは誰かが曖昧な表現も、「波瀾」に〈男は悪いが垢抜けのした、藝人染みた弟の精二郎といふ医学士〉、〈余程前にわづか許り一しよになつてゐた先の夫〉などとあることから類推ができもするし、なぜ手紙はお祖母あさんからなのかという点についても「波瀾」に〈大野は子供の時両親にわかれたので〉とあることで納得がいく。したがって「独身」が、独身生活離脱直前の大野の精神風景を描いたものであることは自明のごとくに思われもするが、「独身」という作品の自律した世界において、そのことが言えるのかどうか、それを検討してみたい。

3

主人大野と客戸川・富田との間で交わされる〈有妻無妻といふ議論〉は、ところで作者鷗外自身が合評「標新領異録」の『好色一代女』評（「めさまし草」明30・7）で巻三の一「町人腰元」を評した〈妻は持つべきものか、持つまじきものかと、例の両端を叩いた論が、この段に見えて居ります〉との言を想起させよう。『好色一代女』の当該章段に即するならば、妻は持つべきものとする論拠は、〈世をたつるからはなくてもならず〉、吉野の奥山に住む男も「淋しさも口鼻をたよりにわするゝ」と語るように、〈捨がたくやめがたきは此道〉とする、すなわち、世の中を渡っていくとき、寂しさを忘れさせてくれるのが男女の道であるという認識であり、一方、妻は持つまじきものとする論拠は、〈人の妻も男の手前たしなむうちこそまだしもなれ。後は髪をもそこ〳〵にして諸肌をぬぎて。脇腹にある瘤を見出され。有時は様子なしにありきて左の足の少長いしられひとつ〴〵よろしき事はなきに子といふ者生れて。なをまたあいそをつかしぬ〉ような成り行き、すなわち、たとい美女でも狎れてくると欠点が露呈し、子どもが生れたとなればなおさら愛想が尽きるものだという認識である。前者の有妻論は、〈土地が土地なので、丁度今夜のやうな雪の夜が幾日も幾日も続く〉中で〈自分が寂しくてたまらないので、下女もさぞ寂しからうと思ひ遣つて〉、ついには〈下女が下女でなくなつた〉事態に至った友人についての戸川の話に該当する。後者の無妻論については、「波瀾」の中で大野が「女は子を産むと損ねる。切角綺麗な顔や髪を台なしにしてしまふのは、馬鹿馬鹿しいではないか」と言い、秘かに避妊の処置をしていたのが夫婦間の〈波瀾〉の一つであったことと符合し、また「町人腰元」における「一生の詠物ながら女の姿過たるはあしからめ」との祇園甚太の言葉は、「波瀾」で、富子の美貌について「いつなんどき倶利加羅紋々の兄いに出刃庖丁を持つてあ

ばれ込まれるか分からない様な妻を持つてゐるのも一興だらう」と言った親友古川の言葉を大野が気にかけていることと通底する。幸田露伴「井原西鶴」（明23・5）にいう〈西鶴事を記するに多くは比較対照の叙法を用ゐて、読む者をして両端を敲きて其中の消息を悟らしむ〉との指摘を承けて「町人腰元」の章段にその例証を見た鷗外が、「波瀾」の世界を承けつつ「独身」を結構するにあたり、この両端を敲くという思考方法[4]に示唆を受けたことは十分考えられよう。

さて、『好色一代女』巻三の一「町人腰元」は、藤本箕山『色道大鏡』巻十四「雑女部」と特に対応関係の明確な章段であるが[5]、鷗外「独身」においても、有妻論を展開する戸川と富田の話はいずれも、遊女ではなく地女をめぐってであり中でも下女との婚姻話であった。富田が「どうも小倉には御主人のお目に留まつたものがなささうだ。多分馬関だらうと思つて、僕は随分熱心に聞いて廻つたのだが、結果が陰性だつた」と言って、小倉旭町や赤間関の遊廓への出入りをまず調べ、その事実の無いことが判明したとき、「一体ここの御主人のやうな生活をしてゐられては、周囲の女の為めに危険で行けない」「いつどの女とどう云ふ事が始まるかも知れないんだからね」と語る、その〈周囲の女〉とはしたがって地女を指すことになる。地女を〈遊女に対して地縁・血縁の網の目の中にいて、結婚の対象となる素人の女〉[6]と解するならば、ではその地女の中で下女を結婚の対象として設定した意味は何だろうか。

『好色一代女』「町人腰元」で、腰元が主人をあからさまな性的魅力で誘惑したことと比較するなら、「独身」で二人の客が紹介した下女は、その策略の意図の如何を別にしても、一代女とは趣を殊にする。戸川の友人宮沢が妻とすることになった下女は、性欲からというよりも、雪国の冬の夜の寂寥と無聊に相応じたことがその男女関係の機縁であり、富田の友人箕村が妻とすることになった下女お梅さんの場合も性的関係が前面に出されているわけではない。箕村がお梅さんを妻とするに至った経緯を、富田は次のように語っていた。

前の細君が病気で亡くなつて忌中でゐると、或日大きな鯛を持つて来て置いて行つたものがあつたさうだ。箕村がひどく驚いて、近所を聞き廻つたり何かして騒ぐと、その時はまだ女中でゐたお梅さんが平気で、これはお稲荷様の下さつた鯛だと云つて、直ぐに料理をして、否唯なしに箕村に食はせたさうだ。それが不思議の始で、をりをり稲荷の託宣がある。梅と婚礼をせいと云ふ託宣なんぞも、やつぱりお梅さんが言ひ渡して置いて、箕村が婚礼の支度をすると、お梅さんは驚いた顔をして、お嫁さんはどちらからお出なさいますと云つたさうだ。僕は神慮に称つてゐると見えて、富田に馳走をせいと云ふ託宣があるのだ。

ところで右の叙述の素材は、松原純一氏が指摘したように、(7)「小倉日記」明治三十三年一月三日の条の次のような記述にある。

夜郡病院長澄川徳至る。酒を飲ましむ。談精神病に及びて曰く。此地狐憑頗る多し。医二村嘯菴年六十余にして、一婢を畜ふ。年二十余。常に枕席に侍せしむ。一日外より帰りて畏怖の色あり。云く会々一少年に挑まる。漸くにして逃れ還れりと。此より狂を発し、毎月朔望狐至ると称して、酒を呼んで怒罵す。二村その実に狐なるを信ず。僕がこれに同ぜざるを以て、狐至るを候ひて僕を招く。至れば、婢の意気太だ旺なるを見る。令して云く。速に泥鰌を買ひ来りて、澄川に酒を喫せしめよと。二村唯々として命を聴く。肯て仰ぎ視ず。婢且飲み且号ぶ。忽にして云く。二村衰老気力なく、陰萎事を済せず。何ぞ言ふに足らんやと。僕故に問うて云く。卿は狐なり。何を以てか

二村の陰萎を知ると。婢の云く。乃ち狐なりと雖、豈此間の消息を解せざらんやと。然れども二村終に曉らざるなり。犬神は未だ曾て見ずと云ふ。

「小倉日記」の右の記述をプレテクストとして「独身」における箕村とお梅さんの話と比較してみると、二村の婢は元来性的関係にあったのが二村の性的不能ゆえに空閨を喞つ折しも、一少年に挑まれた事件を契機にヒステリー症状を呈して狐憑となったらしいことがわかる。一方、箕村の下女お梅さんにおける稲荷の託宣には、そのような行為をとるに至った因由が不明である。すなわち、「小倉日記」における二村の婢をめぐる言説の読み直しとしての「独身」該当部分の記述は、妻の死という不幸を、忌中に早くも慶事に転換させ(鯛の下賜)、それを調理し食させることで主婦の座の円滑な交代劇の共犯者とさせて、その座を獲得した、あえていえば、お梅さんの才覚(計略)をこそ類推させる。「小倉日記」において症状・病因など症例そのものへの興味が主眼であった狐憑は、ここでは家庭経営のための手段のごとき趣へと転化している。戸川の話の中で、宮沢の下女とその親許(もと)が「いづれ妻にするから」という宮沢の言葉に固執したように、富田の話の中の箕村の下女梅も、妻という地位や結婚という形態の継承・遵守をこそ達成しているのである。そして、戸川が「今は東京で立派にしてゐるのだが、なんにしろ教育の無い女の事だから、宮沢は何かに附けて困つてゐるよ」と語り、富田が「併し兎に角第二の細君が直ぐに出来たのは、箕村の為めに幸福であつた。箕村は一日も不自由をしない。箕村のお客たる僕なんぞも不自由をしない。主人が幸福なら、客も幸福だ」と語る、宮沢と箕村との現況は対照的であるにせよ、二人ともに下女への愛情から結婚という形態を選び取ったのではないのであった。とすれば、これは、鷗外が「心頭語」でいう〈東洋先婚後愛の俗〉の、愛という内容よりも婚礼という形式が先行するという、形

式優先の側面を照射したとも見られよう。もっとも日本の先婚後愛の俗が〈上流の夫婿と新婦とは、華燭の夕に至りて、纔(わずか)に其面を相識るを例とす〉を典型とすることを思えば、下女としての職務遂行を通してその人柄を知ってはいただろうが、結婚の対象として考えられてはいなかったのである。結婚の対象として考えてはいない下女としかし結婚という形態をとった、お稲荷様の託宣を信奉した箕村においてより明らかに示される、いわば慣習に籠絡されてしまった例として、客の話した二つの婚姻話はあると思う。そして、その籠絡される可能性をためすようにして、客の帰ったあと大野は下女の〈竹を女として視ようとした〉のである。

4

さて、戸川の話が終わったとき、寧国寺さんが大野宅に姿を見せる。二軒の古本屋に分けて売却されていた大智度論の揃いを買い上げたことを報告、「跡に残つてゐる本のうちには、何か御覧になるやうなものもあらうかと思ひましたので、一寸お知らせに参りました」という。それから、大野の、科学も法・権威者は仏・その信奉者は僧であり、「君だつてやつぱり三宝に帰依してゐるよ」との、富田にいわせれば〈お講釈〉があって、富田によるもう一つの下女との婚姻話が始まる。話の聞き手としての大野の反応は、ではいかなるものであったか。大野にほぼ一貫して維持されているものは〈微笑〉である。

「独身」において〈笑い〉は、作品解読の鍵概念というべきで、〈遠慮深い〉戸川に対して、豪放磊落な富田は〈幅の広い顔に幅の広い笑〉を見せ、東京のお祖母あさんの伝える富子は、美貌ともう一つ、〈一度も笑はざりし事〉をその際立った特徴としていた。そして大野を特色づける〈微笑〉は、寧国寺さんにおいてより完璧に成就されている。〈寧国寺

さんは殆ど無間断に微笑を湛へてゐる〉〈寧国寺さんは饂飩をゆつくり食べながら、顔には相変らず微笑を湛へてゐる〉〈寧国寺さんは羊羹を食べて茶を喫みながら、相変らず微笑してゐる〉〈寧国寺さんは、主人と顔を見合せて、不断の微笑を浮べて聞いてゐた〉と繰り返される寧国寺さんのその微笑は、小泉八雲が「日本人の微笑」（明26・5）で述べた〈自制と克己から生れる幸福をあらわしている〉〈菩薩の微笑〉[8]を想起させよう。下女と宮沢とのなりゆきを語る戸川の話の途中で、富田が同じような状況だと注意を喚起すべく「おい。お竹さん。好く聞いて置くが好いぜ」と言ったとき、〈始終にやにや笑つてゐた主人の大野が顔を蹙めた〉のであってみれば、寧国寺さんと大野の微笑は微妙な差異をもっているといえようが、ともかく大野はほぼ一貫して、微笑を以て二人の客の話を聞いているのである。有妻論の急先鋒たる富田による〈独身生活を攻撃すること〉の〈最後の突撃〉にも、〈主人の無頓着らしい顔には、富田がいくら管を巻いても矢張微笑の影が消えない〉とあり、有妻論への大野の反応は、〈微笑〉によって、それらの論難に動じないことが示されているといえるだろう。

大野は、微笑によって、二人の客の話が意味する慣習・習俗への屈服としての結婚を認容しないことを示す。そして客の帰ったあと、下女竹を〈女として視よう〉として〈これまで一度も女だと思つたことがなかつたが、今女だと思はうとしても、それが殆ど不可能なのである〉と確かめ、一方、それでは〈異性に対する感じ〉が自分にはないかといえば、かつて百姓の娘に対して〈この島田に掛けた緋鹿子を見る視官と、この髪や肌から発散する匂を嗅ぐ嗅覚とに、暫くの間自分の心が全く奪はれてゐた〉と認める、この一種の両端を敲く思量において、大野はそれぞれ〈覚えず微笑した〉のであった。この微笑は、世俗に迎合・屈服しない自己の能力への満足と、一方それが自己の資質をことさらに抑圧したゆえのものではないと確認できた喜びとにそれぞれ基づいているといえようし、こうしたことが寧国寺さんの微

笑との違いでもあろう。富田の評言に従えば〈独身生活をberufsmaessig に遣つてゐる〉寧国寺さんが、そもそも大野のような自己点検をするはずもないからである。

大野の微笑は、寧国寺さんのごとく禁欲的なものではなくvoluptè（肉体的快楽）を排除したものではない。〈此一刹那には大野も慥かに官能の奴隷であつた。大野はその時の事を思ひ出して、又覚えず微笑した〉と、語り手・大野ともに、百姓の娘から受けた視官と嗅覚とによる官能嗜好を確認しているのである。そして大野はお祖母あさんからの手紙を読む。

谷田の奥さんの仲介で、お祖母あさんは、井上富子とその母親に上野で引き合わせてもらう。お祖母あさんは、〈世の中にはこの様なる美しき人もあるものかと、不思議に思はれ候程に候〉といい、性質も〈怜悧なることは慥かに候〉と述べつつ、〈只一つ不思議に思はれしは、茶店に憩ひて一時間ばかりもゐたるに、富子さんは一度も笑はざりし事に候〉と報告する。

丁度西洋人の一組同じ茶店にゐて、言語通ぜざる為め、色々をかしき事などありて、谷田の奥さん例の達者なる英語にて通弁をして遣され、富子さんの母上も私も笑ひ候に、富子さんは少しも笑はずにをられ候。尤前便に申上候通、不幸なる境遇に居られし人なれば、同じ年頃の娘とは違ふ所もあるべき道理かと存じ候。何は兎もあれ、御前様の一日も早く御上京なされ候て、私の眼鏡の違はざることを御認なされ候を、ひたすら待入候。かしこ。

異なる言語・文化の国に来た外国人とそれに応対する側とが、意思の疎通を欠いて円滑なコミュニケーションにこわ

ばりを生じているとき、両者を仲介した谷田の奥さんの側に、いまは傍観者としていることのできるお祖母あさんたちは、一層の余裕と無遠慮とをもって、そのこわばりのもたらすおかしさを覚えているといえようか。ここでの笑いは、林達夫氏が「笑い」[9]で引かれたホッブス『人性論』の〈笑いとは、他人の弱点、ないしはわれわれ自身の以前の弱点に較べて、われわれのうちにある卓越さを突然認めたことより起こる突然の優越感以外の何物でもない〉という定義に合致するように思われる。さらに富子が笑わなかったことについては、笑われる者の不幸を多くの場合予期し、笑う自分自身が孤独になるようなワライを、極度に少なくしようとする永い間の日本人の努力の一形態が女性の慎しみに発するエミであると論じた、柳田国男「女の咲顔」が参考になろう。

この場合のエガオは、笑いの目的物に対してでなく、むしろ笑う人に向っての一種の会釈だったとも見られる。こんなことに笑いこけるのは、はしたないと内心では思っても、自分ばかりつんとしていては、反感を表示したことになる。人が楽しみまたはいい気になっている場合が、ことにまわりの者のエガオの必要な時だったので、これを雷同附和とは誰も見ていないのである。[10]

富子がこのとき、大野の祖母や自分の母親と一緒になってワラウことは慎しみに欠けることでもあろうが、エガオすら見せないことは、他との協調に顧慮しない所為と見做されるということにもなるのである。エガオを見せても附和雷同とは見ないのが一般的な状況で、しかし富子はそれを潔しとはしなかったことになる。

大野は、二人の客の話が意味する慣習・習俗への屈服としての結婚を、微笑を以て排斥した。そして富子は、附和雷

同的協調を潔癖なまでに拒んで、ワラウこともエムこともせず孤立を甘受する。大野と富子は、どうやら反俗孤高の姿勢によって、その類縁性を明らかにしつつあるように思われる。

5

「独身」には、主人公大野と、語り手と、それぞれによる〈講釈〉が展開されている。この二つの講釈の意味を考えてみたい。

「一体御主人の博聞強記は好いが、科学を遣つてゐる癖に仏法の本なんかを読むのは分からないて。仏法の本は坊様が読めば好いではないか」との富田の批判に対して大野は、「僕なんぞの考では、さう云ふ君だつてやつぱり三宝に帰依してゐるよ」と答えて、次のように言う。

君は科学科学と云つてゐるだらう。あれも法なのだ。君達の仲間で崇拝してゐる大先生があるだらう。Authoritaetenだね。あれは皆仏なのだ。そして君達は皆僧なのだ。それからどうかすると先生を退治しようとするねえ。Author-itaeten-Stuermerei といふのだね。あれは仏を阿し祖を罵るのだね。

この大野の説明は、「又お講釈だ。ちよいと話をしてゐる間にでも、おや、又教へられたなと思ふ。あれが苦痛だね」と富田をして閉口せしめた言説であるが、「独身でゐるのさへ変なのに、お負に三宝に帰依してゐると来るから溜まらない」という富田にとっては、独身生活を berufsmäßig に（職業として）やっている寧国寺さんならともかく一般人とし

ては異端であるということだろう。とすれば、西洋科学も絶対ではなく一つの制度的枠組にすぎず、三宝（仏法僧）帰依という思考の枠組と相似であるとの、大野の〈講釈〉は、科学の絶対的優位性への異議申し立てにもなっていよう。(11)

〈講釈〉は、ところで語り手もまた、第一節において開陳した言説であった。

外はいつか雪になる。をりをり足を刻んで駈けて通る伝便の鈴の音がする。

伝便と云つても余所のものには分かるまい。これは東京に輸入せられないうちに、小倉へ西洋から輸入せられてゐる二つの風俗の一つである。常磐橋の袂に円い柱が立つてゐる。これに広告を貼り附けるのである。赤や青や黄な紙に、大きい文字だの、あらい筆使ひの画だのを書いて、新らしく開けた店の広告、それから芝居見せものなどの興行の広告をするのである。勿論柱は只一本丈であつて、これに張るのと、大門町の石垣に張る位より外に、広告の必要はない土地なのだから、印刷したものより書いたものの方が多い。画だつても、巴里の町で見るaffichesのやうに気の利いたのはない。併し兎に角広告柱がある丈はえらい。これが一つ。

今一つが伝便なのである。Heinrich von Stephanが警察国に生れて、巧に郵便の網を天下に布いてから、手紙の往復に不便はない筈ではあるが、それは日を以て算し月を以て算する用弁の事である。一日の間の時を以て算する用弁を達するには、郵便は間に合はない。Rendez-vousをしたつて、明日何処で逢はうなら、郵便で用が足る。併し性急な恋で、今晩何処で逢はうとなつては、郵便は駄目である。そんな時に電報を打つ人もあるかも知れない。これは少し牛刀鶏を割く嫌がある。その上厳めしい配達の為方が殺風景である。さういふ時には走使が欲しいに違ない。会社の徽章の附いた帽を被つて、辻々に立つてゐて、手紙を市内へ届けることでも、途中で買つて邪魔にな

るものを自宅へ持つて帰らせることでも、何でも受け合ふのが伝便である。手紙や品物と引換に、会社の印の据わつてゐる紙切をくれる。存外間違はないのである。小倉で伝便と云つてゐるのが、この走使である。

伝便の講釈がつひ長くなつた。小倉の雪の夜に、戸の外の静かな時、その伝便の鈴の音がちりん、ちりん、ちりん、ちりんと急調に聞えるのである。

右の記述を、主として小倉時代に筆録されたと目される備忘録的資料集「塵冢」における伝便についての記載〈小倉の使丁なり。鐸を鳴して往く。一便四銭とす。一説に此制土佐国に出づといふ。現に土陽便利組と称する組合あり。熊本は嘗て一たびこれを設けしに今は廃せりといふ〉と比較するならば、「独身」における伝便についての説明は〈東京に輸入せられないうちに、小倉へ西洋から輸入せられてゐる〉という規定を確定的に述べていることが注目されよう。すなわち、西洋を規範としての東京（中央）の優位が、しかし伝便と広告柱という二つの風俗にかぎり逆転して、小倉（地方）が優位に立っていることを表しているといえるのである。(12)

主人公・語り手ともに〈講釈〉という言説を展開したのであったが、その講釈の内容そのものも、語り手は東京vs小倉・大野は科学vs仏教という対立の図式において、中心的なるものと周縁的なるものとの反転という方向性を示していたといえよう。そしてこの方向性は、作品世界におけるテーマたる有妻論（妻帯）vs無妻論（独身）という対立の図式においても適用しうるのであって、富田の有妻論に対しては、独身こそが正統である寧国寺さんの存在を以て拮抗させ、富田らの有妻論における慣習・習俗への屈服としての結婚を、寧国寺さんに準ずるような微笑によって斥けつつ、しかし官能嗜好を排除しない点では寧国寺さんとの異質性を有する大野独自の微笑が提示されたのである。妻帯（世俗の側

からの正統）vs独身（反俗の側からの正統）という対立の図式は、ここに至って反俗的妻帯への止揚が示唆されているのではあるまいか。笑わない美女富子は、その反俗的風姿によって、大野の結婚の対象たりえているからである。

大野は、〈異性に対する感じ〉が自分の裡に潜んでいることを、百姓の娘に対しての、〈島田に掛けた緋鹿子を見る視官〉と、〈髪や肌から発散する匂を嗅ぐ嗅覚〉とによって〈官能の奴隷〉であった経験を想像することで確認したが、引き続いて読んだお祖母あさんからの手紙によっても、笑わない美女富子への印象を心内に刻印したであろう。お祖母あさんの手紙の文面を紹介したのち、語り手は、大野の心理・感想には一切言及せず、次のように述べて作品を閉じた。

読んでしまつた大野は、竹が机の傍へ出して置いた雪洞に火を附けて、それを持つて、ランプを吹き消して起つた。これから独寝の冷たい床に這入つてどんな夢を見ることやら。

語り手の想像は大野の夢に及んで作品は収束する。鷗外が寧国寺さんのモデル玉水俊虡から講義を受けた唯識論によれば、身・口・意の三種に大別される人間の行為にもとづく経験は、〈薫習（くんじゅう）〉とよばれる意味化のプロセスによって、〈種子（しゅじ）〉となって最深層の内的トポスである〈アラヤ識〉に貯蔵される。[13] 語り手によって、その内容を明示できないながらもその存在は想定される大野の〈夢〉は、ところで、百姓の娘に対する官能嗜好の経験の痕跡や笑わない美女富子への関心の惹起を、いわば〈種子〉として貯える〈アラヤ識〉に擬せられないだろうか。大野の〈夢〉が胎を結んだならば、それは富子との結婚を示唆しているといえないだろうか。〈小倉の冬は冬といふ程の事はない〉と説き起して小倉の冬の夜を叙し、〈翌朝手水鉢に氷が張つてゐる。此氷が二日より長く続いて張ることは先づ少い。遅くも三日目には風が変る。

雪も氷も融けてしまふのである〉として、第一節を首尾照応させた、語り手のその叙述は、それを暗示していると思われるのである。

注

(1) 小堀桂一郎『西学東漸の門――森鷗外研究――』(昭51・10)、『森鷗外の『智恵袋』』(昭55・12)。

(2) 小堀桂一郎『森鷗外の『智恵袋』』四九八ページ。

(3) 竹盛天雄氏に「波瀾」の人物設定の「独身」における継承について指摘がある(『鷗外その紋様』昭59・7、二一三ページ)。

(4) これは「灰燼」(明44・10～大1・12)の主人公山口節蔵の思考方法でもある。〈物の両端を敲かずには置かない節蔵の思量〉(拾肆)と説明されている。

(5) 檜谷昭彦「『好色一代女』試論――遊女評判記の受容――」(『井原西鶴研究』昭54・11所収)参照。

(6) 上野千鶴子「解説(三)」、『日本近代思想体系23 風俗 性』(平2・9)五四七ページ。

(7) 松原純一「鷗外現代小説の一側面」(『明治大正文学研究』第22号、昭32・7)。

(8) 『小泉八雲集』(新潮文庫)の上田和夫氏の訳に拠る。ちなみに、「波瀾」においても寧国寺さんは〈何があつても嬉しさうな、忍辱の相をしてゐる人〉とされている。〈忍辱(にんにく)〉は、〈大乗の菩薩の修行徳目である六波羅蜜の一つ。あらゆる侮辱や迫害に耐え忍んで怒りの心をおこさないことで、これを修行実践することによって、すべての外からの障害から身を保護することができるので、「忍辱の衣(ころも)」「忍辱の鎧(よろい)」(法華経法師品、勧持品)といわれる〉(『岩波仏教辞典』)。また〈覚えず微笑んだ〉というのは、鷗外作品の人物像にしばしば見られる特徴的な表情表現であるが、小倉時代に取材した「鶏」(明42・8)の少佐参謀石田小介にも見られるそのような〈微笑〉は、しかし、たとえば、「カズイスチカ」(明44・2)の老花房の寧国寺さん的な微笑から、「灰燼」の山口節蔵の無気味な内実を孕む〈柔和忍辱の仮面〉や、「藤鞆絵」(明44・5、6)の佐藤のやや皮相的な〈微笑の仮面〉まで、それぞれ質的位相は異なる。なお、長嶺宏「小倉時

代の鷗外」（「国語と国文学」昭28・8）は、旧妻登志子の死の衝撃や玉水俊虥との出会いのあった小倉時代に〈独特な「忍」の心術が生み出され、それが「仮面」となり、「あそび」となり、résignationとなり、「傍観者」となって、その後の鷗外精神の骨格をなしてくるのである〉と論じている。

(9) 林達夫「笑い」（『講座現代倫理5・内と外の倫理』昭33・8。『林達夫著作集6　書籍の周囲』所収）。

(10) 柳田国男「女の咲顔」（「新女苑」昭18・6）。引用はちくま文庫版『柳田国男全集9』に拠る。

(11) 科学に従事する者が、しかし科学の絶対的普遍性までは信じていないという認識は、次作「里芋の芽と不動の目」（「スバル」明43・2）においても表明される。東京化学製造所長理学博士増田翼（たすく）は「酸素や水素は液体にはならねえといふ。ならねえといふ間はその積りで遣つてゐる。液体になつても別に驚きやあしねえ。なるならなるで遣つてゐる。元子は切つたり毀したりは出来ねえ。Atomはatemneinで切れねえんだといふ。切れねえといふ間はその積りで遣つてゐる。切れたつて別に驚きやあしねえ」と語る。

(12) 西洋を規範としての地方に対する東京の優位は、「独身」に登場する帝国採炭会社理事長大野・裁判所長戸川・市病院長富田が、いずれも小倉を定住の地とする者ではないという設定、とりわけ、東京大学卒業後、洋行という本来の目的のための費用を貯えるべく赴任している富田（モデルたる澄川徳もまた小倉からドイツに赴くのだが）の進路にも示されていよう。そして、中央に対して地方を、西欧の科学に対して東洋の仏教を意識的に対置させた「独身」は、鷗外「普請中」（明43・6）などに示された西洋との距離感は〈西洋／日本〉の関係の中に自律した〈地方としての日本〉を再発見していく過程であり、それは泉鏡花「高野聖」（明33・2）などの〈近代における異郷訪問譚〉が地方のもつ非西洋的（もしくは東洋的）な風景を理想化していったことと相似的な関係にあったと論じられた松村友視氏の論旨に位置づけうる作品ともいえよう。松村友視「〈中央〉と〈地方〉のはざま」（『日本文学史を読むV　近代1』平4・6）参照。

(13) 井筒俊彦「『意味の深みへ』の「あとがき」」（『意味の深みへ――東洋哲学の水位――』昭60・12。『井筒俊彦著作集9　東洋哲学』所収）参照。